

原著

フランクルの「幸福追求のパラドックスの図」の解釈

Interpretation of “Figures That Represent the Paradox of Pursuit of Happiness” by Frankl

雨宮 徹

要約：強制収容所からの生還者であり、精神科医としてニヒリズムと格闘し続けたフランクル (V.E.Frankl, 1905-1997) は、人間は快感や力よりも、むしろ本質的には意味を求めるものであると述べている。快感や力を意志の対象とすることは、本来の「意味への意志」からの逸脱であるばかりでなく、却って快感や力を取り逃がす自滅的な結果をもたらすとされる。彼は、こうした現象を示すのに、特に名前が与えられているわけではない図を用いるが、拙論ではそれに「幸福追求のパラドックスの図」と名付けた。この図に、フランクルが別の文脈で論じており、かつ、彼の思想の支柱をなしている「人生の意味への問いに関するコペルニクスの転回」を加味して考察した。その結果、「意志」と「意図的な追求」を分けて考える必要のあることが明確になり、「幸福追求のパラドックスの図」をフランクルの直接的な言及を超えて積極的に解釈し、新たな図を提示することができた。

キーワード：フランクル、幸福のパラドックス、図、コペルニクスの転回、意志

はじめに

強制収容所体験を綴った『夜と霧』¹⁾の著者であり、精神科医として生きる意味の問題を考え続けたフランクル (V.E.Frankl, 1905-1997) は、人間が本質的に求めているのは、フロイト (S.Freud, 1856-1939) が主張するような快でも、アドラー (A.Adler, 1870-1930) が主張する力でもなく、意味であると考えている。快や力は現実的に人間の大きな関心事であるが、フランクルによれば、それはあくまでも意味との

関係の中で重要事となるのであって、意味なしにそれら自体を追い求めるのは、本来のあり方からの逸脱であるとされる。そればかりでなく、快や力を直接的に追求すると、却ってそれらに到達することもできなくなるのだ、とされる。

この現象を説明するために彼が用いる図があるが、特に名前が与えられてはいるわけではない。諸富祥彦はフランクルが図を用いて説明するこの現象を「古来、哲学者たちによって『幸福のパラドックス』と呼ばれ、その罠に陥ることのないように戒められてきたもの」²⁾として、それを承けつつ拙論では、この図を「幸福追求のパラドックスの図」と呼ぶことにした

Tohru Amemiya
E-mail : amemiyat@kawasakigakuen.ac.jp
大阪河崎リハビリテーション大学
リハビリテーション学部

い。「幸福のパラドックスの図」とせずに「幸福追求のパラドックスの図」としたのは、フランクルの論の展開のポイントは、「幸福」よりも「追求」の側にあるはずだ、というのが拙論の見解だからである。

その根拠となっているのは、人生の意味を問う際に実施されなければならないとフランクル自身が別の文脈で述べている「コペルニクス的転回」という観点である。この観点を基軸に据えることにより、フランクルが示した「幸福追求のパラドックスの図」における不足が補われ、そこで示されるべき本質が明確になるはずである。

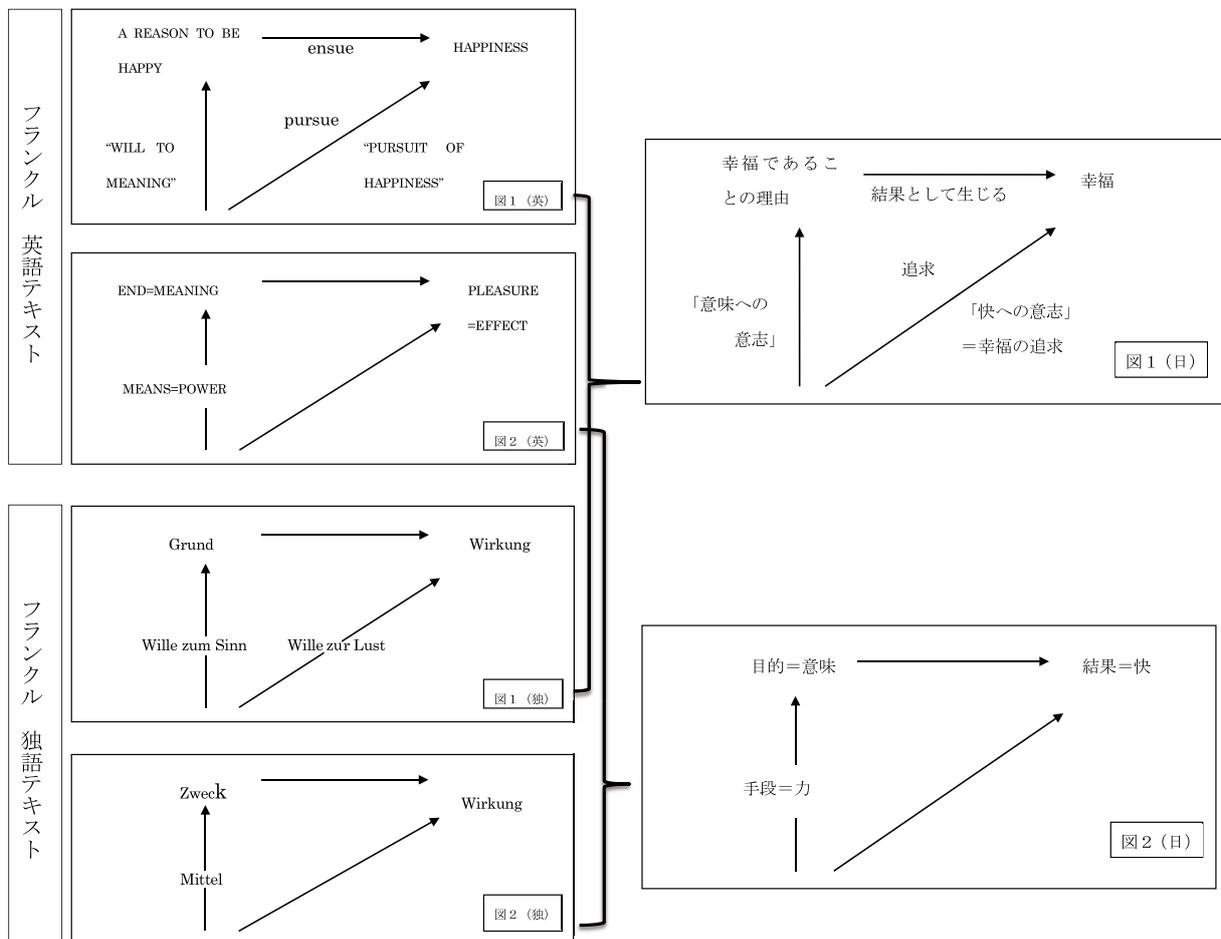
全体としては、「幸福追求のパラドックスの図」を詳細に検討し、フランクルが述べようとしていたことを内在的に理解する一方、人生の意味への問いに関する「コペルニクス的転回」とい

う観点を導入することにより、新たな図を提示することを拙論の目的とする。

1. フランクルの二つの図

フランクルは「幸福追求のパラドックスの図」を、ほぼ同時期に書かれた二つのテキストにおいて用いている。一方のテキストは英語で書かれた *The Will To Meaning*³⁾ もう一方は、ドイツ語で書かれたテキスト *Der Leidende Mensch*⁴⁾ であるが、「幸福追求のパラドックスの図」に付されている用語は若干異なっている。

1970年に出版された英語のテキスト *The Will To Meaning* で用いられている図⁵⁾ を図1(英)と図2(英)とする。一方、ドイツ語の講演がベースとなり、1971年に「意味を探求する人間」として学会誌に収録されたテキスト⁶⁾



で用いられている図⁷⁾を、図1(独)と図2(独)とした。英、独それぞれのテキストにおいて示されている図は、順序も内容も、図1(英)と図1(独)、図2(英)と図2(独)が対応しているが、使用されている用語に相違があるので、拙論では両者を見比べながら、過不足のないように併せ日本語でまとめ直し、図1(日)、図2(日)とした。図1(日)は、図1(英)と図1(独)に、図2(日)は、図2(英)と図2(独)に対応している。

さて、図1と図2を用いてフランクルは、快や力を追求することは、意味への意志からの逸脱であることを説明しようとする。まず、図1(日)を見てみよう。これは幸福の概念を中心とし、それがどのように生じ、どのように取り逃がされるのかを説明するための図になっている。それに対して図2(日)は、手段—目的—結果という概念の系列に、力—意味—快という概念の系列を重ね合わせ、各々の相関を示した図になっている。

順番が逆になるが、まずは図2(日)について確認してみると、基本に手段—目的—結果の連関が据えられ、そこにそれぞれ力—意味—快が付置されていることがわかる。ここで留意しなければならないのは、先にも簡単に触れたように、フランクルは彼の思想形成に大きく影響を与えたフロイトの精神分析学と、アドラーの個人心理学を批判的に継承しているという点である*。この図で用いられている力—意味—快の三つは、フランクルに先行する二人の立場を彼の意味の思想に位置付けると同時に、人間的現象を説明するための概念となっている。

フロイトの、初期から晩年にいたるすべての理論において「人間の全人生を通じてのあらゆる

活動の変わらぬ最終目的は、個体の平衡の再構築だと考えられていた」⁸⁾という見解を示したのはシャルロッテ・ビューラー(Charlotte Bühler, 1893-1974)であったが、フランクルはこれを支持している⁹⁾。実際フロイトは、人間の心を心的装置とみなし、そこに内在する興奮の量を、できるだけ低く、あるいは少なくとも恒常に保っておくようにするのが、この装置の機能であると考えている。つまり心的装置は「恒常原則」(Konstanzprinzip)に従うものだとされ¹⁰⁾、主観的には、この恒常性を乱す興奮量の増大が不快として、その解除が快として感じられる。こうして恒常原則から、すなわち心的装置に内在するエネルギー量を問題とする経済的観点から、人間の心の主観的原則であるとされる「快感原則」(Lustprinzip)も説明される。結局のところ、心的装置の法則に従い、快の獲得が人間の基本的な行動原則になっていると理解されているのである。

他方でアドラーは、フロイトが快を人間の基本的関心としたのに対して、優越性の獲得こそ、人間の基本的関心だと考えた。彼によれば、人間は生物としては単独の個体として生きていくことはできず、共同体を形成することで生存を維持しなければならないということ¹¹⁾、また、共同体の中で子どもは自分を圧倒する大人たちに囲まれて育たざるをえないということ¹²⁾、これらのことから、誰もが人生を開始するにあたって多かれ少なかれ、深い「劣等感」(Minderwertigkeitsgefühl)¹³⁾を持つと同時に、その補償として「力を求める努力」(Streben nach Macht)¹⁴⁾をすることになるという。この劣等感自己保全の基盤の脆弱さの意識から発しているがゆえに、その補償としての優越性の獲得こそが、人間のもっとも基本的な関心事

*フロイトの「精神分析学」、アドラーの「個人心理学」に対し、フランクルは独自の「ロゴセラピー」を展開するようになる。彼のロゴセラピーは、ソウチェック(Wolfgang Soucek)が1948年に提示した用語に倣って、精神分析学、個人心理学に引き続く「ウィーン精神療法の第3学派」と呼ばれることがある。

になるとみなされるのである。^{*}

フランクフルは、フロイトが人間の本質とみなした快を求める性質を「快への意志」、アードラーが人間の本質とみなした力を求める性質を「力への意志」と名付け、両者はともに彼が人間の本質とみなした「意味への意志」(Wille zum Sinn, will to meaning)が満たされないときに生じるものとしている。つまり、意味への意志が欲求不満に陥ると「実存的空虚」(existential vacuum)¹⁵⁾が発生するとされるのだが、それを麻痺させるために、意味が充足された結果として生じる快を直接的に追求してみたり、多くの場合において意味を充足するために必要な力そのものを、意味の実現とは関係なしに追求してみたりするのだ¹⁶⁾、と考えている。後に確認するように、ここで言われる意味というのは、「人生の意味」と言われる際の意味、すなわち自己存在を根拠づけるものとしての意味を指し示している。つまり、自己存在を根拠づける意味が人間存在のもっとも基本的な関心であるのに、意味実現のための手段である力や、意味実現の結果として生じる快を人間理解の中心に据えることで、フロイトやアードラーは誤謬を犯してしまったのだ、というのがフランクフルの主張するところである。

では改めて、図1(日)を確認してみよう。この図で示されている大意は、いわゆる幸福というものは直接的に追求すべき対象ではない、ということである。

ここで用いられている「幸福」という用語は、古来、様々な定義がなされている多義的な概念であるが、フランクフルは特に定義していないので、どのような意味で使われているのか、文脈から確認する必要がある。まず、図2(日)に

おけるその位置に「快」が置かれていることから、これは幸福「感」という自己の主観的な心理状態を指し示していると考えられる。また、図1(日)における「幸福であることの理由」の位置に図2(日)では「意味」が置かれていることも併せて考えるならば、幸福感が成立するのは、自らの意志が「意味」に向けられているときであり、意味こそが「幸福であることの理由」である、ということになる。つまり意味は幸福感が成立するための条件となっており、意味が充たされなければ、幸福感も生じないということである。

フランクフルによれば、自己の意志が意味に向けられず、幸福そのものを欲し追求しても、実際のところ、そこに到達することはできず、その意図は果たされることなく自滅してしまうという。すなわち「快への意志」は人間の本質であるどころか、それ自体が自滅的であるということである。その例として、性的快感を直接的に追求しようとして却ってそこから遠ざかって行く性神経症が挙げられている¹⁷⁾。

一方で、アードラーに関してフランクフルは、「地位を求める衝動」(status drive)¹⁸⁾が人間理解において重視されているとみなしている。しかし地位を獲得しようとする努力については、「自らの地位を求める衝動を見せてしまう人は、遅かれ早かれ野心家としてつまはじきにされるであろう限りにおいて、自滅的であることを立証するものである」と述べ、匿名で出すつもりで書いた本が却って高い評価を得て認められる結果になったという、自らの経験を例として示している¹⁹⁾。

「力への意志」をめぐるフランクフルの説明は、幸福についての説明に比して明確さに欠けてい

^{*}ただし、この優越性の発揮は、必ずしも他者を競争において出し抜いたり、暴力によって屈服させたりするという方向に発揮されるわけではない。アードラーは「共同体感情」(Gemeinschaftsgefühl)という、これもまた人間に生得的なものである他者への共感的能力も認め、この感覚に矛盾しない仕方によって優越性が発揮されうると考えている。具体的にそれは、共同体、あるいは共同体の成員をより良い状況へ導くために尽力するというような仕方によって発揮されるという。Vgl., Adler, A., *Menschenkenntnis*, S.22-3. [高尾利数訳、『人間知の心理学』、36頁。]

る。幸福の直接的追求の場合は、フランクルが図示した構図にしたがって、元来、副次的結果として成立する快感を、その成立の仕組みから逸脱した仕方でも獲得しようとして破綻し、そしてまたそれを本来のあり方へと回復させることによって到達することができた、と説明されている。ところが「力への意志」はそもそも図の中に示されていない。示されているのは、図2（日）における手段＝力のみである。「力への意志」と「意味への意志」とは異なるものであるはずなのに、図2（日）における手段＝力は、図1（日）における意味への意志と同じ位置に置かれている。つまり「意味への意志」、「力への意志」、「手段＝力」の関係が明示的には述べられていないのである。彼が例として挙げている「野心家としてつまはじきにされる」のも「名声を博す」のも、共同体のメンバーである他者からの承認の有無によって成り立つ事柄である。他者の思惑は自己の有り様に事後的に加えられるものであって、地位を求める衝動そのものが自滅する仕組みが直接的に示されているとは言い難いと思われる。

2. 人生の意味への問いに関する「コペルニクスの転回」

けれども筆者には、図1（日）、図2（日）にフランクルの思想における根本的観点を加えることにより、彼の考えに矛盾しない仕方でも、快への意志の自滅性ととも、力への意志の自滅性を示すことができるように思われる。その観点とは、フランクルが人生の意味に関して「コ

ペルニクスの転回」と呼ぶことによって示しているものである。

われわれが、世界体験の本来的構造に立ちもどり、それを深く熟考しようとするならば、人生の意味への問いにある種のコペルニクスの転回を与えなければならない。すなわち、人生それ自身が人間に問いを立てているのである。人間が問うのではなく、むしろ人間は人生から問われているものであり、人生に答えねばならず、人生に責任を持たねばならないものなのである。そして、人間が与える答えは、「具体的な人生の問い」に対する具体的な答えでしかありえない。現存在の責任のうちその答えは生じ、人間は実存そのものにおいて彼固有の問いに対する答えを「遂行する」のである。[引用文における傍点は、原文におけるイタリックを示す。]²⁰⁾

フランクルは、複数のテキストにおいてこの転回を取り上げている*。各々の文脈においてアクセントの置かれているところが多少異なっているものの、本質的な部分はもちろん共通している。それは「人間は人生から問われている」という基本認識から出発しなければならない、ということである。

では、引用文の内容を、順を追って確認していこう。我々は通常、そしてまた苦境に陥っているときには特に、自己の幸・不幸を基準に人生の重みを量り、幸福であれば生きるに値する人生、不幸であれば生きるに値しない人生だともみず。そして不幸であると感じられるとき、

*「コペルニクスの転回」という用語が用いられている4つのテキストを初版の発行順に並べると、以下の通りとなる。
Ärztliche Seelsorge. 9.Auflage, Deutscher Taschenbuch, 2007, S.107. [山田邦男監訳、岡本哲雄、雨宮徹、今井信和訳、『人間とは何か—実存的精神療法』、春秋社、2011、131頁。]
...trotzdem Ja zum Leben sagen. Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1997, S.124-5. [霜山徳爾訳、『夜と霧』、みすず書房、1991、183頁。]
...trotzdem ja zum Leben sagen. Drei Vorträge, Franz Deuticke, 1946, S.18-19. [山田邦男、松田美佳訳、『それでも人生にイエスと言う』、春秋社、2012、26頁。]
Der unbewußt Gott, Psychotherapie und Religion, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1995, S.12-13. [佐野利勝、木村敏訳、『識られざる神』、みすず書房、1962、11-12頁。]

我々はこのような苦しみの中で生き続けるだけの意味があるのか、それほどまでして耐え抜くだけの意味が、この人生にあるのだろうか、と問う。これが通常、われわれが行う人生の意味への問いの有り様である。こうして自己が人生の意味を幸福の多寡で量ろうとする姿勢のもと、幸福を積極的に追求しようとしたり、この苦境を取り除くような幸運が訪れやしないかと、人生に期待したりする。

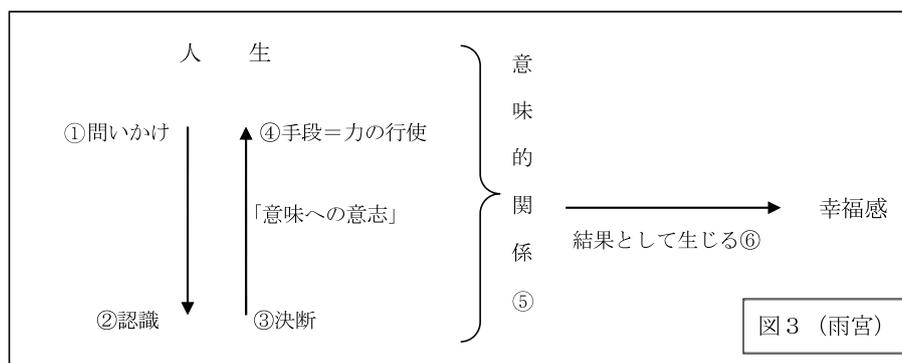
しかし、こうした姿勢では、意味を捉えることはできないとされる。なぜなら人間は、直接的には自己の幸・不幸の状態とは関係なしに、自己を超えた人生の側からすでに問われており、この問いかけを聞き取り、応答するところに意味が成立する、というのがフランクルの見解だからである。自己から人生へ、と向けられていた問いの方向を、人生から自己へと転回させる。人生の意味への問いは、正しくはこのように理解すべきだという「ある種のコペルニクスの転回」がここで主張されているのである。

そして人生から提示される問いは、「具体的な人生の問い」となり、それに対して人間の側も具体的に答えなければならないとされる。各人に課せられた使命は特殊であり、「各々の人格の唯一性」と「状況の一回性」に応じて変化し、そのつどに応答することによって果たされる²¹⁾。つまり人生が人間に向かって放つとされる問いというのは、ごく具体的であり、それに対する応答もごく具体的でなければならないということである。

人生の側から問いかけられることによって成立する意味が具体的にどのようなものであるかは、彼が人間の意味体験の基本的なカテゴリーとする「体験価値」(Erlebniswert)「創造価値」(schöpferischer Wert)「態度価値」(Einstellungswert)²²⁾として示すものによってイメージすることができるだろう。たとえば「体験価値」においては自然や芸術の美の体験および他者への愛の体験、「創造価値」においては仕事や芸術創作、「態度価値」においては変更不可能な運命に翻弄されるままにならず、それに対して主体的に臨むことで実現される態度が挙げられている。これらに通底するのは自己に、自己以外のものがそれ自体として尊重するに値するものとして出会われるということである。フランクルが述べる人生から問われる体験とは、自己以外の何ものかが、自己の都合とはまったく無関係に価値的であるということの体験なのである²³⁾。

3. 問いかけ

では、コペルニクスの転回に即して「幸福追求のパラドックスの図」に修正を加えていこう。フランクルは図1(日)および図2(日)において、まず意味への意志の発動から始まり、その向かう先に位置付けられた「幸福であること」の理由「目的」「意味」に到達した結果として幸福が生じるという構図を示していた。しかし、「コペルニクスの転回」においては人生が人間



に問いかけを発するところから始まる。すると、図1（日）に、まずは「幸福であることの理由」「目的」「意味」の側から下に向かう矢印が加えられなければならない。この矢印こそが第一義的なものであり、かつ、快への意志および力への意志が破綻する構造を明確に示すポイントとなるものである。

人生の意味に関する「コペルニクス的転回」によって示されたこの意味の側の問いかけから始め、幸福感の成立に至るまでを順にナンバリングしたものが、図3（雨宮）である。

まず①自己を超えた人生の側からの問いかけがあり、②それを自己が認識するということになる。この問いかけは自己に応答することを要請するが、自己の側の都合とは関係なしに応答する必要があると感じられるのは、自己を超えた何ものかが、それ自体で価値を感じさせるからである。この要請に自己が応じるとき、③決断と④ある種の手段（=力）の使用によって、実践的に応答をすることになる。この応答によって⑤意味的關係が成立すれば、そのときに⑥幸福感が生じることとなる。

図3（雨宮）で注意すべきは、フランクルの図1（日）および図2（日）で、意味への意志が向かう先に置かれていた「幸福であることの理由」「目的」「意味」という用語を用いず、その代わりに「人生」という用語を用いた点である。その理由は、フランクルの「コペルニクス的転回」に従えば、この位置にあるのは「人生」となっているからであり、そしてまたそこでのポイントである、人間の思惑以前にすでに問いが発せられているということに留意するなら、「幸福であることの理由」「目的」「意味」の三つの用語は誤解を招く可能性があるからである。まず「幸福であることの理由」という用語を避けたのは、これが「幸福」との関連において、すなわち⑥の運動を表すための用語となっており、呼びかけられそれに応答するという①

②③④の運動を表現する用語ではないからである。また、「目的」という語は意志の対象として位置づけられるが、一般的にこの用語は③④の方向性を示すものの、そこに①②の方向は含まれていないからである。そして「意味」ということばは関係の有様を示すことばであるのに、ここに置かれてしまうと関係項になってしまうからである。したがって「意味」をこの位置には置かず、問いかけと応答という関係の全体⑤に「意味的關係」という呼称を与えることとした。

ところで我々がある目的に向けて決断した後、その実現までの間に様々な手段を講じることになるが、決断から実現までの間には時間差が生じる。この時間の経過中には、外部から様々な刺激もたらされ、また心身からも様々な欲求が生じるだろう。つまり、様々な関心が次々と生じ、それらの新たな関心に引きつけられて当初の決断によって目指されていたのとは異なる行為がなされたり、そもそも決断したはずの内容が忘却されてしまったりすることがありうる。それにも関わらず、当初の決断に即した実践的関心が維持されるとき、我々はそこに意志の働きを見る。その際、目的が実際に実現されるか否かは問題ではない。まだ目的に到達していなかったとしても、結局、目的が達成されずに終わったとしても、手段が目的に向けて取捨選択および行使されている時点で意志は成立している。つまり意志とは、決断において措定された目的にしたがって実践的手段を持続して方向付ける、統一力だと言うことができるだろう。こうした見解に従うとき、図3（雨宮）におけるように、決断と意味へ向けられた手段は、その両者を合わせて「意味への意志」として位置付けられることになる。

こう考えたとき、フランクルが図1（日）における「意味への意志」の位置に、図2（日）では「手段=力」を置いているのが理解できる。

手段 - 目的 - 結果の連関において、手段 (= 力) は目的に向かって行使されるが、この方向性の決定および維持は、意志によってなされている。手段と意志の両者は、目的の具体的な解決方法という点から見れば手段となり、目的への方向性の維持という点から見れば意志となる、一つの現象を説明するための二つの構成要素という関係にあるのである。したがってここで表現されているのはあくまでも「意味への意志」であり、「力への意志」を表現しようとするならば、後で提示する、図4 (雨宮) におけるような示され方になるはずである。

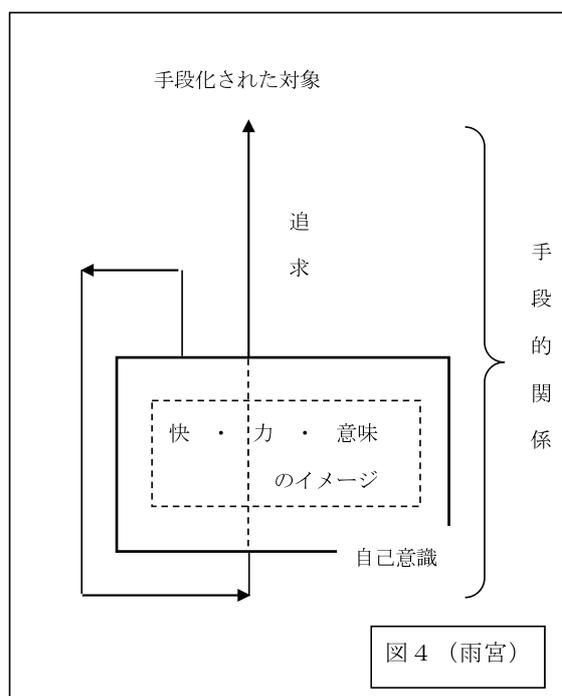
そしてここで最も重要となる観点は、決断や意志が、超越的なものからの問いかけによって成立しているという点である。「まさしく人間の現存在における大きな、真正の - 実存的に真正の - 決断こそ、どのような場合でも徹底的に非反省的に、したがって無意識的に生じる (erfolgen) のである」²⁴⁾ とフランクルが述べる時、①超越的なものからの問いかけと②その認識という事態が、③④における自己の意識的な取捨選択に先立って、つまり反省的意識に先立ってまずは「生じ」ているのだということが示されている。この①問いかけと②その認識があくまでもベースとなって、意味への意志が成立するのである。

したがって、図3 (雨宮) に即して「力への意志」と「快への意志」について考えてみた場合、まず共通して言えることは、両者において人生の問いかけが聴き損ねられているということである。つまり①の人生の側からの問いかけおよび②その認識が成立していない。すると、力および快を追求する場合、人生から自己へと向かう矢印が消えると同時に、当然、意味的關係も消えてしまう。したがって、⑤意味的關係、①問いかけ、②認識がこの図から消え去る。さらに、意味的關係が成立しなくなるのであるから、⑥結果として生じる幸福感も、消え去ってしま

うということになるのである。

4. 追求

自己を超え出たものとの関係が見失われるとき、人間の関心はどこに向かうのだろうか。人間の関心は迂回し、自己に向かうことになるとフランクルは考える。彼はこの事態をブーメランにたとえる²⁵⁾。この道具は放たれた後、狩人の手許に戻って来る機能を備えているが、それは狙った獲物を捉えることができなかつたときにのみ、発揮される。人間の意志も同様であり、自己を超えた何ものかを捉えることができなかつたときにのみ、再帰的に自己がその対象となるとされる。これを示したのが、図4 (雨宮) である。



先に見た図1 (日)、図2 (日) のいずれにおいても、意味への意志が発動するその場所に「自己」が記述されていないのは、こうした理由によるものだと思われる。つまり、自己は反省的に捉えられるときに固定化され実体化されることになるが、反省的意識に先立ち、意志が自己以外の対象に無意識的に引きつけられて

いるとき、意識に捉えられるのは対象のみであり、その際自己は透明化し、対象として意識に捉えられることはないからである。自己意識を足場にして対象と関わるのではなく、超越的对象に引きつけられるところから関係が始まるのだとすれば、それは自己意識にとっては己を超えて成立している関係、すなわち無意識のうちに成立している関係だと言うことができる。したがって、図1（日）、図2（日）のいずれにおいても、垂直に上に向かう矢印が発する部分に自己を置く必要はないが、幸福、快感、結果を直接的に追求する矢印の基底部分には、自己が置かれたほうがよい、ということになる。

では図4（雨宮）に即して、もう一度「快への意志」や「力への意志」について確認して行こう。人生からの問いかけを聴き損ねるとき、我々は虚無感や苦悩に襲われる。その原因は人生からの問いかけを聴き損ねたことにあるのだが、それとは気がつかず、往々にして我々は、意味的關係が成立した際に生じた幸福感を人生からの問いかけなしに目指したり、意味的關係が成立する際に役立つ力そのものを問いかけ抜きに目指したりするのである。つまり、あくまでも人生から問われ応答するという関係の中で成立していたはずの充実感を、反省的に自己意識のうちに、関係を見捨てて追求してしまうということである。具体的に言えば、自己意識に残された、意味的關係の成立において得られた「幸福感のイメージ」、意味的關係の成立において行使された「力のイメージ」を意志の目的としてしまうということである。

フランクルが「力への意志」、「快への意志」と呼ぶ現象が生じているとき、問いかけ-応答関係は遮断されているが、だからといって必ずしも自己以外の対象との関係が遮断されているわけではない。人生の側からの問いかけが遮断された人間は「自己意識」のうちに残っている「幸福のイメージ」「力のイメージ」の実現を直

接の目的とすると同時に、意味的關係成立の際には問いかけてくるものであったはずの、自己を超えた何ものかを手段化する。つまり、手段および副次的結果の目的化と同時に、目的の手段化が生じるのである。自己を超えた何ものかは、「幸福のイメージ」が目的とされる場合は快を獲得するための手段となるであろうし、「力のイメージ」の実現が目的とされる場合は、支配の対象となるであろう。したがって、自己と自己以外のものとは、問いかけられ応答するという相互的な関係から、自己の願望に即して対象を手段化するという、一方的な関係となるのである。

ここに「追求」の構造が明らかになる。図1（日）および図2（日）から考えても、フランクルは快や力そのものを否定しているわけではない。それらは意味的關係成立の必然的な結果として生じるもの、その実現に当たって必要なものとして位置づけられている。しかし、快や力自体が目的とされ、自己の外側に位置するものが手段化されるとき、そこから発せられる自己への問いかけが聴こえなくなってしまう。換言するならば、自己にとって自己以外のものは代替可能、任意なものとなり、両者の関係には、必然性が宿らなくなってしまうのである。つまり追求とは、自己を超えるものからの問いかけは一切ない中で、自己の側の願望に基づき対象を手段化しようとする関係のことだということができる。

ここでさらにもう一点、確認しておかなければならないことがある。それは、これまでの図には特に取り上げられていないが、追求の対象となりうるのは、原理的に力や快ばかりではない、ということである。意味や愛など、フランクルが「人間的現象」と呼んでいるものも、追求の対象となりうるし、そうなるや否や、手段に転落してしまう。

要求したり、命じたり、支配したりすることができないような、ある種の活動が存在するという事実に、我々は向かい合わなければならない。なぜそれらの活動を要求、命令、支配することができないのかといえば、それらを意のままに (at will) 構築することは不可能だからである。私は信じようと「意志する (will)」ことはできない。希望を持つように「意志する」こともできないし、愛することを「意志する」こともできない。そして何よりも意志することを「意志する」ことはできないのである。そのような企ては信頼、希望、愛、意志といった人間的現象に対するまったくの操作的なアプローチを反映している²⁶⁾。

一般的に、いわゆる幸福論においては、人間が人生の中心に設定する目的が何であるのかが問題とされる。もちろん、そうした議論は必要であるし、フランクルのこれまでの議論において、快や力ではなく意味を際立たせようとしていたのも、同一線上のこととして理解することができる。しかし、追求ということにのみ照準を当てて考えてみれば、何を目的とするのか、ということではなく、どのように目的に関わるのか、ということが重要となる。上の引用の直前には、エンカウンターグループのセミナーで、初対面の人間に友情を感じようと必死の努力をすればするほど、ますますそうした心情から遠ざかっていく人物の例が述べられているのだが、友情に限らず「信頼、希望、愛、意志といった人間的現象」のすべてが、「操作的アプローチ」を受け付けない、とされている。つまりは、フランクルが問いかけへの応答とみなす現象も、それ自体を目的として追求しようとするならばその試みは破綻せざるをえない、ということである。たとえば何か崇高な目的を掲げ、その目的に身を捧げたいと心底考えていたとし

ても、それが追求される限りは破綻する。自滅の構造から抜け出そうとするならば、自己意識の内に存在するイメージを先行させ、それを人生の側に投影しようとするのではなく、ともかく人生の側から発せられる問いかけを直接的に聴き取るために、耳を澄ますことに徹さなければならない。意味を実現するとき、人間は何かを追求するのではなく、何かに導かれるのである。

したがって「意味への意志」は、「快への意志」「力への意志」ばかりでなく、「意味の追求」とも根本的に異なっている。問いかけ-応答関係であるものと、願望に基づく対象の手段化とを明確に区別するためにも、フランクルが「快への意志」「力への意志」と呼ぶものは、「快の追求」「力の追求」と呼ぶ方が適切であると言えるだろう。したがって、「幸福追求のパラドックスの図」は、フランクルの「コペルニクス的転回」の観点を加味し、意味が成立しているときのものとしては拙論における図3 (雨宮)、追求へ転落してしまった際のものとしては、図4 (雨宮) のように表記するのが適切だと言えるのではないだろうか。

おわりに

以上、フランクルの思想の内在的理解を進めるという立場から、彼の図式の解釈を行ってきた。そこで比較対象とされたのは、精神医学の二つの立場である精神分析学と個人心理学に限られており、より広い幸福論の文脈の中で検討することはできなかった。もし、幸福論の文脈の中に置くとするならば、行為における人間の意識や無意識の有り様から幸福を考えるという点に、フランクルの思想の特徴を見ることができるかもしれない。今後の課題としたい。

【引用文献】

- 1) Frankl, V.E., *...trotzdem Ja zum Leben sagen : Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982. [霜山徳爾訳、『夜と霧』、みすず書房、1956。池田香代子訳、『夜と霧』、みすず書房、2002。]
- 2) 諸富祥彦、『フランクル心理学入門—どんな時も人生には意味がある』、コスモス・ライブラリー、1997、84頁。
- 3) Frankl, V. E., *The Will To Meaning :Foundations and Applications of Logotherapy*, Expanded Edition, A Meridian Book, New York,1988. [大澤博訳、『意味への意志—ロゴセラピーの基礎と適用』、ブレーン出版、1979。]
- 4) Frankl, V. E., *Der Leidende Mensch : Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*, Verlag Hans Hüber, Bern.
- 5) Frankl, V. E., *The Will To Meaning*, p.34, 36. [大澤博訳、『意味への意志』、40, 42頁。]
- 6) この講演録は、現在、以下のフランクルの二つの著書に収録されている。*Der Leidende Mensch : Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*, Verlag Hans Hüber, Bern, 1984, および *Psychotherapie für den Alltag*, Herder, Oslo, 1992. 拙論では、これらのうち *Der Leidende Mensch* に掲載されたものを底本とした。また、この講演の簡略版が収録されている二つの著作にも、同じ図が掲載されている。*Der Mensch vor der Frage nach dem Sinn*, Piper GmbH & Co.KG, München, 8 Auflage, 1996, S.101-102, および *Das Leiden am sinnlosen Leben: Psychotherapie für Heute*, Herder, Freiburg/Basel/Wien, 8 Auflage, 1997, S.71-72. なお、版が変わっても、簡略化され掲載されるテキストが変わっても、図に変更点は認められない。
- 7) Frankl, V. E., *Der Leidende Mensch*, S.9, 11.
- 8) Bühler, Charlotte, “Basic Tendencies in Human Life: Theoretical and Clinical Considerations,” in *Sein und Sinn*, edited by R.Wisser, Max Niemeyer, Tübingen, 1960, p.484.
- 9) Frankl, V. E., *The Will To Meaning*, pp.31-32. [大澤博訳、『意味への意志』 37-38頁。]
- 10) Freud, S., *Jenseits der Lustprinzips*, *Gesammelte Werke XIII*, S.Fischer Verlag, 1987, S.5.[井村恒郎他訳、小此木啓吾他訳、『フロイト著作集6』人文書院、1970、150頁。]
- 11) Adler, A., *Menschenkenntnis*, zweite verbesserte Auflage, S.Hirzel, 1928, S.21. [高尾利数訳、『人間知の心理学』、春秋社、2002、34頁。]
- 12) *ibid*, S.24. [同上書、41頁。]
- 13) *ibid*, S.52. [同上書、81頁。]
- 14) *ibid*, S.53. [同上書、81頁。]
- 15) Frankl, V. E., *The Will To Meaning*, p.45. [大澤博訳、『意味への意志』、51頁。]
- 16) Vgl., *ibid*, p.35. [同上書、41-2頁。]
- 17) Vgl., *ibid*, p.33, [同上書、39頁。]
- 18) *ibid*, p.34. [同上書、40頁。]
- 19) Vgl., *ibid*, p.35. [同上書、41頁。]
- 20) Frankl, V.E., *Ärztliche Seelsorge. Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse. Mit den >Zehn Thesen über die Person<*, 9.Auflage, Deutscher Taschenbuch, 2007, S.107. [山田邦男監訳、岡本哲雄、雨宮徹、今井信和訳、『人間とは何か—実存的な精神療法』、春秋社、2011、131頁。]
- 21) *ibid*, S.102. [同上書、124頁。]
- 22) Frankl, V. E., *Der Leidende Mensch*, S.203.
- 23) 雨宮徹、「フランクルの『態度価値』について」、『大阪河崎リハビリテーション大学紀要』第4巻、2010。
- 24) Frankl, V.E., *Der unbewußte Gott.Psychotherapie und Religion*, Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, München, 1995, S.23. [佐野利勝、木村敏訳、『識られざる神』、みすず書房、1962、32頁。]

- 25) Frankl, V. E., *The Will To Meaning*, p.38. [大澤博訳、『意味への意志』、45 頁。]
- 26) Frankl, V.E., *The Unheard Cry for Meaning: Psychotherapy and Humanism*, Simon and

Shuster, New York, 1978, p.75. [諸富祥彦他訳『〈生きる意味〉を求めて』、春秋社、1999、124-5 頁。]